

演題9

FKOの佐藤式使用法による咬合変化

○清水久喜・塩野幸一
(鹿大・歯・小児歯)

上顎前突症例にみられる不正の要因としては、上顎骨の過成長、下顎骨の劣成長、下顎骨の機能的遠心位および骨と顎骨の不調などがあり、それぞれの要因に対応して治療方針が異なってくる。1982年佐藤は、下顎骨の劣成長を伴った上顎前突症例に対して、FKOの臼歯咬面部を削除せず咬みしめを行わせると、下顎枝高が増大することを報告している。このことは下顎骨の劣成長を伴った上顎前突症例の治療に際してきわめて有効な方法であるばかりでなく、咬合誘導において重要な意義をもつことと考えられる。

当小児歯科外来では最近、この佐藤式FKOを導入し臨床に応用している。

今回は、下顎骨の成長促進を目的として佐藤式FKOを使用した症例について、側貌頭部X線規格写真の分析結果から、下顎枝高の増大を始めとした咬合の変化について検討を加えたので報告する。

演題10

直接歯髄覆罩された乳歯の臨床経過観察

○増田純一
(福岡市・マスダ小児歯科)

ウ蝕に罹患した乳歯歯髄を断髄、抜髄することなく、適切な処置によりできるだけ保存し、生理的な歯根吸収により後継永久歯と交換させることは、健全な永久歯を作るうえでも重要である。しかし、乳歯の歯質は薄くウ蝕の進行も速いため、深在性の乳歯ウ蝕では、軟化牙質除去中に露髄させることは、臨床上たびたび経験することである。

永久歯の露髄に対する直接歯髄覆罩の予後に関する報告は、安田、倉持等がかなりの成功率で良好な経過を報告しているが、乳歯の直接歯髄覆罩に関する報告は少なく、一般的に非感染状態の小さな露髄だけが適応症とされている。私の臨床では乳歯歯髄の保存のために、Indirect pulp Cappingや直接歯髄覆罩法を多く応用しているが、今回は昭和57年から昭和60年までの2年間に直接歯髄覆罩法を行なった乳歯66本について、年齢別、部位別、予後等について臨床ケースを中心に報告する。年齢別では2才児8名、3才児17名、4才児15名、5才児9名、6才児8名、7才児4名、8才児1名、9才児1名、計63名。部位別では下顎第2乳臼歯が最も多く20本、次に下顎第1乳臼歯17本、上顎では第2乳臼歯11本、第1乳臼歯10本、前歯は上顎前歯のみで7本、総数66本で初回のリコールに応じなかった13本を除いた53本について経過観察を臨床症状とX-rayによって行った。観察期間は最短5カ月から最長3年2カ月であった。